

大黒屋光太夫 記念館だより



特集 冬の展示「光太夫が書いたロシア文字」

☆連載 光太夫をとりまく人々② ★記念館ニュース

☆今後の展示計画 ★編集後記

発行: 鈴鹿市

問合先: 大黒屋光太夫記念館

三重県鈴鹿市若松中一丁目 1-8

059-385-3797 (Fax 兼用)

ホームページ <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu/>

冬の企画として

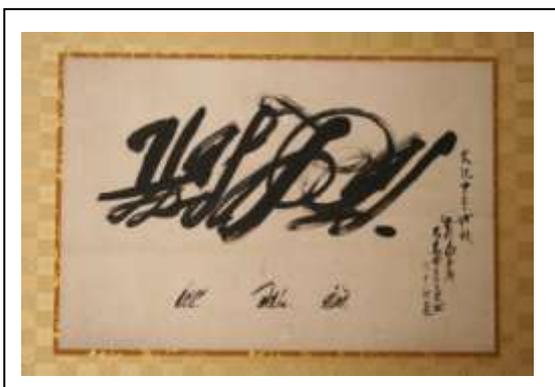
「光太夫が書いたロシア文字」をコーナー展示しています！

大黒屋光太夫が書いたロシアの文字は比較的多く残っています。

その殆どは、「イロハニホヘト」など単純に日本語の発音をロシアの文字でつづったものと、「ツル」・「フクジュ」など縁起のよい言葉をつづったものです。時々、俳句や和歌をロシア文字で書いたものや ABC なども見られます。いずれも、ロシアという未知の国の文字が珍しかったために、人々に乞われて制作されたものと思われる。その書風は、とても力強く日本の草書を思わせるような独特のものです。

現在見つかっている光太夫のロシア文字は、光太夫と交流のあった蘭学者などの子孫の家に残されているものが約半数です。残り半数は、全国に散見しますが、それらの伝来をたどっていくと、元々は白子の廻船問屋など鈴鹿市の沿岸部に伝来したものが非常に多いことがわかります。その殆どは、光太夫の 60 代以降の作品で、光太夫が帰国後 20 年以上経っても故郷と繋がりを持っていたことを示唆するようにも思われます。

今回は、光太夫の力づよい筆跡から光太夫の人柄や業績に思いをはせていただくとともに、光太夫が好んでつづった縁起のよい言葉を鑑賞していただければと思います。



つる (鶴)



いろはにほへと



いろは 48 文字と洋数字



めいげつや たたみのうえに まつのかげ

大黒屋光太夫記念館ニュース

☆【展示】 特別展が終了しました。期間中、市内外の多くの方にご来館頂きました。ありがとうございました。

☆【来館者数】 開館以来の入場者数が 10000 人まであと少しです！（H18.12.10 現在） 今後も多くの方に来館していただけるよう展示の企画なども考えていきたいと思ひます。

☆【展示】 今回の展示替えでは、リクエスト展示コーナーを設けました。館内アンケートなどで要望のあったロシア科学アカデミー保管の「光太夫がエカテリーナ2世に献上した持物」のレプリカと深田神社から寄贈された「漂流船実録」を展示しています。また、もっと近くで見たい！という要望があった「芝蘭堂新元会図」については、光太夫が描かれている部分の拡大パネルを作成しましたので、近付いてじっくりご覧下さい。

☆【NEW FACE】 記念館職員の木下が H18 年 12 月末で退職することになりました。新年からは、代わって山下が来館者の応対をさせていただきます。続投の伊藤ともどもよろしくお願ひ致します。



「帰ってきた光太夫」の展示風景

大黒屋光太夫をとりまく人々② ジャン・レセップス

ここでは、大黒屋光太夫に関わった様々な人たちを取り上げ、ご紹介していきたいと思ひます。

現在、記念館では「光太夫が書いたロシア文字」として光太夫の墨書を展示するとともに、光太夫とロシアの言葉に関係する資料も展示しています。その中に「レセップスの旅行日録」（『Journal historique du Voyage de M. de Lesseps』）という本があります。今回は、この本の著者であるジャン・レセップスをご紹介します。

ジャン・レセップスは、スエズ運河で有名なフェルナンド・レセップスの叔父にあたる人物です。1766 年、フランスの男爵の家に生まれました。早くから多くの言語に才能を発揮し、17 歳でフランス領事館の副領事を務めました。そして、1785 年には、フランスのルイ 16 世の命を受けた大航海士ラペルーズによる北西航路発見の旅に通訳と史料編纂官を兼ねて同行しました。ラペルーズ一行は、フランスを出航して大西洋を横断し、ハワイを経由してアラスカへ至り、マカオから日本近海へと移動しました。対馬海峡をぬけ、日本海沿岸を北上し、宗谷海峡を通過して、カムチャッカに到着しました。ジャンは、そこでラペルーズらと別れ、シベリアを横断し、陸路フランスへ帰国しました。

展示している「レセップスの旅行日録」は、ジャンがカムチャッカからの探検の様子を描いた旅行記録です。第 1 巻 203 ページには、光太夫を「活発な精神とやさしい性質の持ち主」と紹介し、「賢く意思の強い指導者」と讃えている部分があります。ジャンは、折りしもカムチャッカに滞在中だった光太夫と直接出会い、記録を書き残しているのです。

この本は、フランスで出版され、ヨーロッパ中でベストセラーになりました。それも、光太夫がまだロシアに滞在している間にベストセラーになっているのですから、驚きです。本好きのエカテリーナ 2 世も読んでいたと言われてています。レセップスは、はじめて光太夫をヨーロッパに広く紹介した人物なのです。

大黒屋光太夫記念館の展示計画

記念館では、多くの方に大黒屋光太夫について興味を持っていただき、さまざまな視点から大黒屋光太夫について学んでいただくために、常設展は行わず、季節ごとに特別展と企画展を行っております。以下の通り展示を予定しておりますので、ご来館の参考にしてください。

12 月 11 日～3 月 29 日

冬の展示「光太夫が書いたロシア文字」

帰国後の大黒屋光太夫は沢山のロシア文字を書いています。
地元に残る光太夫直筆のロシア文字の墨書を中心に展示します。
(大黒屋光太夫遺墨／「レセップスの旅行日録」初版 公開)

3 月 31 日～7 月 1 日

春の展示「光太夫の里帰りⅡ」

帰国から 10 年後、光太夫は故郷に里帰りを許されました。
その様子を村に残っていた古文書でたどります。
(市指定文化財「大黒屋光太夫らの帰郷文書」公開)

7 月 3 日～10 月

「知っておどろき！大黒屋光太夫Ⅱ」

光太夫の一生をわかりやすく展示します。自由研究にもどうぞ。
(「芝蘭堂新元会図」／映画「おろしや国酔夢譚」衣装 公開)



10 月下旬頃？

第 3 回特別展 内容はまだ未定です。

編集後記

特別展が終了しました。特別展のテーマだった「ラクスマンの来航」は、歴史の授業で習ったという方も多く、黒船来航の最初の事件として知られています。しかし、ラクスマンが大黒屋光太夫を日本に送ってきたことは、実は地元の鈴鹿でもあまり知られていません。大黒屋光太夫の漂流がきっかけで、日本とロシアがはじめて外交を行ったということをもっと多くの方に知っていただきたいと企画したのが、今回の特別展でした。

特別展期間中は、たくさんの方にご来館いただきました。「ラクスマンが光太夫を連れてきたなんて知らなかった」とか「ラクスマンが根室に来たのは知っていたけれど、松前で日本と会談をしたとは思わなかった」などの感想やお言葉を頂き、とても嬉しく思いました。また、札幌市の高木様には、砂原は現在の長万部町ではなく森町であることを教えていただきました。

これらのご意見やご感想を糧として、今後の記念館の展示や企画に生かしていきたいと思っております。